

インターネット上と現実場面での自己開示について

0907045

小野 春奈

【目的】

人は、日常的に自分について相手に伝えることをしている。例えば、自分の名前や自分の好きなこと、自分の対人関係のことや悩みなどである。この行為は自己開示と呼ばれる。

自己開示場面の多くは実際に会って話すという現実場面である。近年では、携帯電話やパーソナルコンピュータなどの電子的なメディアを使った自己開示が普及している。その1つとして、インターネット上での自己開示があげられる。特徴は、特定の個人宛ではない自己開示という点と不特定多数の受信・発信できるという点である。本研究では、インターネット上での自己開示に注目する。

榎本（1987）の研究によると、現実場面での自己開示は、男性より女性のほうが自己開示すると示唆された。しかし、インターネットでの自己開示に関して、野口（2011）の研究によると、インターネット上では男性も女性と同じぐらい自己開示していることが示唆された。

そこで本研究では、インターネット上の自己開示の量について、現実場面との違いと性別から検討する。また、インターネット上の自己開示はどの内容が多く行われているのかを検討する。

【方法】

北星学園大学の大学生 68 名（男性：22 名、女性：46 名、平均年齢：19.63 歳、SD：2.02 歳）であった。

自己開示場面として、現実場面での最も親しい同性の友人への自己開示、②現実場面での知り合ったばかりの友人への自己開示、③インターネット上の自己開示の 3 条件とした。

自己開示尺度：下斗米（1990）や榎本（1997）の自己開示尺度を参考に、現代の大学生の自己開示を測定するのに妥当だと思われる 13 項目からなる自己開示尺度を作成した。13 項目の内容は、①自分の性格について、②自分の趣味について、③学校生活について、④自分の家族について、⑤自分の健康について、⑥性に対する

自分の関心について、⑦自分の友人について、⑧自分の将来について、⑨自分の能力について、⑩自分の容姿について、⑪社会に対する自分の意見について、⑫自分の金銭について、⑬自分の恋愛についてとした。各項目には、6 件法で回答させた。現実場面の最も親しい同性の友人、現実場面の知り合ったばかりの友人、インターネット上の順番で回答させた。

【結果と考察】

まず、性別・自己開示場面の違いで自己開示量に変化があるのか調べた。その結果、交互作用は見られず、また性別では有意な主効果が見られなかった。このことから、性別が自己開示量に影響を与えないと言える。男性も女性も場面の違いや相手の違いによって同じように自己開示量を変化させることが明らかになった。次に自己開示場面では有意な主効果が見られ、現実場面の最も親しい同性の友人への自己開示は、現実場面の知り合ったばかりの友人とインターネットより自己開示していた。このことから、インターネット上の自己開示は現実場面の知り合ったばかりの友人への自己開示と近いものであるということが言える。

自己開示内容に関しては、インターネットでは自分の趣味について一番多く話されていた。また、インターネットの自分の趣味については一番親しい同性の友人に近い自己開示をしている結果を得た。インターネットは、検索などで同じ趣味を持つ人と交流することが可能で、想定される閲覧者が趣味の理解者となり、最も親しい同性の友人に近い自己開示となったと考える。また、インターネットでは「趣味」による繋がりや、出会いを求めて自己開示していることが考えられる。

今後の課題として、年代によってインターネットの自己開示に違いがあることも考えられる。そのため、複数の年代での調査も行う必要があると考えられる。

（指導教員 豊村 和真 教授）